

S子の表現力を高める手立て

—— 主として発語発達からのアプローチ ——

臼 田 季 微 子

1 テーマ設定の理由

自分の気持ちや要求を言葉や動作に表現することは、社会生活上大変重要なことである。特に言葉に出して表現することによって、他とのコミュニケーションが深まり、自信を持って行動できるようになると思われる。S子は、発語がほとんどない上に「ばか」「おちんちん」などの言葉を連発するため、他児とのトラブルが多く、そのことが生活全般での向上を妨げていると思われた。そこで、発語をふやすことによって自分の気持ちを他の人にわかるように表現できるようにさせることは、S子がみんなの中で生き生きと自信を持って行動できることにつながると考えて、下記のような取り組みを行なった。行動と言葉とを一致させ、S子の表現力を高めることによって、社会性を身につけさせたいと考える。

S子の実態（S58年11月）

S 48. 11. 4 生 医学的所見 ダウン症・言語障害（構音障害）・斜視

身体的特徴 身長 119.3 cm・体重 36.9 kg・ローレル指数 217・極度の肥満

遠城寺式発達検査 移動運動 2：9 手の運動 2：3 基本的習慣 3：8 対人関係 3：0

発語 1：9 言語理解 2：3

- 特徴
- 歌・リズムが好きで、身体表現が豊かである。
 - 繰り返しが好きで、繰り返すことによって気分がのってくる。
 - 陽気で世話好きであるが、反面、黙って人をたたいたり押したりすることがある。
 - 人の模倣が上手である。
 - 強制されるとじっとして動かなくなる。
 - 変な言葉を言ったり、変なことをしたりして、人の反応を楽しむ。

2 58年度の取り組み

58年度のS子の個人目標は、『友だち（特にK子、M子）との関係を多く持つ中で、社会性を身につけさせる』とした。S子は模倣が上手で、繰り返すことを好んだので、友だちや教師の模倣を繰り返させながら指導する方法をとった。教材としては、S子の好きなリズム・歌・絵本を通して発語をふやすこととした。

(1) 歌・リズムを通して

学級全員が、「S子さんおはようございます」と歌い、それに対応して「みなさんおはようございます。」と挨拶を返すことを始めた。初めは声に出して歌えず、教師の口元をじっと見つめている

ばかりだった(4月)が、そのうち、隣の席のK子が顔をS子の方へ向けて歌い方を教え始めた。S子は必ずK子の方へ顔を向け、口元を見ながら模倣して口の形を作っていたが、声はほとんど聞きとれなかった(5月)。7月に入ると、ささやくような感じで少し声を出して歌えるようになると同時に、部分的にならK子の方を見なくても歌えるようになった。1月には一人で大きな声で歌えるようになった。友達の模倣と毎日の繰り返しによって、朝の会・帰りの会の時、大きな声で挨拶の歌が歌えるようになったといえる。S子はリズム感のある曲が好きで、音楽をきくと自然に踊り出し、身ぶりもたいへん豊かで音楽の時間など進んで発表するので、学習時は、この歌やリズムを学習の中に組み込み、S子が興味をもって取り組むよう工夫した(七夕発表会、クリスマス会など)。

(2) 絵本を通して

絵本を見るのが好きで、プレイファーストの絵本セットを暇さえあれば出して見ている。「先生」とか「これ」とか言って本の題名や絵を指さして言い方を聞きたがり、一音ずつ区切って言ってやるとまねをして言う。4月当初題名などめっちゃくちゃに言っていたが、一年中毎日のように一冊一冊、一頁一頁、開いては人に聞きしていた効果か、かなりの本の題名がわかり(実際は表紙の絵で判断していると思われる)、言葉に出して言えるようになった。

本の表紙を見て(58年度)				(59年度)	
本の名称	S子一人	教師助言	S子	S子一人	
とり		と	と・り	とり	
かず	ず	か	か・ず	かず	
むし	し	む	む・し	むし	
かたち	たち	か	かたち	かーち	
きがえ		き	きかへ	きがえ	
さかな	な	さ	な	さかな	

本の中の絵を見て		
絵	58年度	59年度
ぞう	どー	そーさん
いちご	ご	いーご
ボール	ボーウ	ボーウ
たんぼぼ	ぼぼ	ぼぼ
きりん		きいん
パンダ		パン

休み時間K子とM子とS子の3人が仲良く本をめくり、字の読めるK子がS子に読み方や名称を教えたり、いっしょに「うわあ、いちご、おいしそう」とか、「うわあ、きれいなお花」とか言い合っていたことも効をそうしているようだ。また、学習時はもちろん、バスの待ち時間を利用して絵本を読みきかせたことも、ひいては発語を促す助けになったと思われる。

(3) まとめ

S子の好きな歌、リズム、絵本を中心に発語をふやす指導を続けてきた。また、友達との関係を重視し、仲良く遊んだり一緒に学習したりする中で、少しずつ社会性が身についてきたように思われる。例えば、挨拶言葉がはっきりしてきた、まわりの人の口を見つめて促されなくても自分から声を出すようになった、当番や日直の仕事がみんなと同じくらいできるようになった、言葉を発し

てから行動するようになりつつある、などである。しかし、変な言葉を繰り返すことや、黙って人を押したりたたいたりする面はまだ改善されていない。今後は、特定の言葉にこだわらなくなるくらい発語をふやすと同時に、そのことによって、自分の気持ちや要求が言葉で表現できるようにして情緒の安定を図りたい。

3 59年度の取り組み

58年度の実践をもとに、59年度のS子の個人目標を『自分の気持ちや要求を表現できるようになる』と定め、次のような方針をたてて取り組んだ。

(1) 基本方針

- ・日常生活全般を通して、行動と言葉とを一致させ、少しでも自分の気持ちや要求を外面に出していけるようにする。
- ・絵本・実物などを見て繰り返し練習し、発語をふやす。
- ・歌・リズム・劇など、興味のあることを通して進んで学習に参加させる。
- ・手先・指先を使う作業をさせて感覚訓練をし、脳に刺激を与える。
- ・養・訓の時間は言語訓練を中心に行なう。

(2) 日常生活指導を通して

生活場面	教師の手立て	S子の様子
登校	教師が必ず「おはよう」の声かけをし、自分から進んでした場合はほめる。また、何か一言（例えば「早いね」とか「暑いね」など）声かけをする。	「おはよう」と元気よく挨拶して教室に入ってくる。「せんせー」「ちょっと」を連発し、「きがえ」と自分で言って着替え始める。
朝の会	日直で立つ時の号令、礼をする時の号令を何度か口伝えで教える。続けて言えない時は区切って言わせる。リズム感のある曲をとり入れて意欲をもたせる。	「今日はS子さんですよ」と言うと、「ちーにーさん（いちにのさん）」と立つ号令をかけ「のーで（せーのーで）」と礼の号令もかけられるようになった。
日記発表	昨日家でしたことを生活ノートを見ながら教師が助言して言わせる。口伝えをしたり手で拍子をとって言いやすくしたりする。	自分一人では「たしは（わたしは）」「しました」を言えるようになった。したことは教師のまねをして、「プール」とか「ぬり絵」とか言う。
自由遊び	ままごとをしている時は教師がお客さんになったり、他の子も一緒に遊ばせるようにしたりする。絵本を見る時は必ず正面にすわり、口の形が見やすいようにして、大きく口をあけてはっきり発音してやる。	「よいしょ、よいしょ」とままごと道具の入ったかごを運んできて、「こんこん（ドアをノックして入れの意）」と言う。「アンパーク」「おちゃ」「ソース」など、料理に関する言養を発しながら作るまね。「（でき）たよ」と言って出し、「もういい」でおしまい。

生活場面	教師の手立て	S子の様子
給食	牛乳パックのふたなどをあけて欲しい時、黙ってさし出したり「はい」と言っ出て出したりしていたのを、「して下さい」と言わせるようにした。してもらった時の「ありがとう」も、少しずつ指導している。「ありがとう」と言ったら渡す習慣づけ。	「しえさい」と言って持ってくる。教師が「し」と言ってやると「て・く・だ・さ・い」とゆっくり言う。 2学期には、給食時のみでなく、何かして欲しい時は必ず「して下さい」とはっきり言うようになった。渡さないで待っていると「りとう」と言う。
そうじ	廊下をふく時、ようい、どん」のかけ声をかける。もう一回と促す。また、終わった後の日直の号令かけを、まねしながら言わせる。(劇・音楽・体育にも応用させる)	「よーい、どん」と言ってふいている。2回目は「もう一回」と言い、おしまいの時は「もういい」と言う。自分で、「これでそうじを終わります」を、それらしく言うようになった。

(3) 生活単元学習を通して

主に劇の指導を通して発語をふやすようにした。7月の七夕発表会では「すいか」という台詞であったが、11月の学習発表会、12月のクリスマス会と漸次台詞をふやしていった。また、他との関わりという点で、自分の名前を言うことと人の名前を覚えて呼びかけるようにすることの2点をねらい、日常生活に生かしていきたいと考えた。

① 新入生歓迎会

新入生を迎えて、小学部合同で行なう歓迎会であり、自己紹介のコーナーが設けられている。これを機会に自分の名前をはっきり言えるようにさせたいと思った。

- ・ 4月6日 — 初めて自己紹介の仕方を指導。模倣して言わせたが、要領がわからず何を言っているかわからなかった。
- ・ 4月7日 — 他の子を先に言わせてから3～4番目くらいに指名するようにした。マイクを持って言わせると、少し言葉をはっきりするように思う。目前で口の形を作って「さ・き・こ」と一字ずつ模倣させたら言えた。
- ・ 4月10日 — 教師が「さ」と言うと、「き・こ」と言うようになった。
- ・ 4月12日 — 後の2字しか言わないので何度か初めの字を繰り返すと、「さ・き・こ」と小さい声で言えた。
- ・ 4月13日 — 歓迎会当日、教師が「さ」と言うと、「さ・き・こ」とはっきり名前を言った。
- ・ その後、折にふれて「お名前は?」と聞くと、「さ・き・こ」と答え出した。
- ・ 5月 — かばんやノートにかいてある自分の名前を見て「さ・き・こ」と言った。

この後、母親と一緒に歩いていて近所の人に「お名前は?」と聞かれて「さきこ」と答えるなど、名前を言うことは定着しつつあり、友達の名前にも関心がでてきたようだ。

② その後の取り組み

友達を指して名前を教えるようにした。何度も繰り返すうち、「これは誰？」ときいたり写真を示したりすると「㊦いこ」とか「㊧まき」とか答えるようになった。初めの一字がなかなか出ない。まだ、呼びかける感じにはなっていないが、相手には通じるので喜びは大きい。

③ クリスマス会

学習発表会では小学部合同の劇「したきりすずめ」のおばあさん役を演じ、「いってらっしゃい」「こら、まて」「もう」などの台詞がはっきり言えた。これを受けて、クリスマス会では、劇「サンタクロースの大きなプレゼント」のトナカイ役に挑戦した。繰り返し練習するうち劇の流れをしっかりとつかみ、動作と関連づけて台詞を覚えさせた結果「いいえ、元気」や「のって下さい」などたいへん上手に言えた。しかし、ここでの目あての一つに子ども達にプレゼントを手渡すシーンで「〇〇ちゃん、どうぞ」と話しかける台詞を導入したが、実際の場面では「どうぞ」しか言えなかった。だが、この取り組みをしているうち、日常生活の中で、教師が「〇〇くん」と呼びかけると、同じように「〇〇くん」と大きな声で言ったり、いすにはってある名札を見て「〇〇くん」と言ってはこんであげたり、テレビを見ているのを見て「〇〇くん」と注意するような言い方をしたりする場面がみられるようになった。「〇〇ちゃん」「〇〇くん」と話しかけられるようになるのもう一息と思われる。



4 まとめと考察

S子は繰り返しによって見通しをもたせると、学習に積極的に参加でき、また能力も発揮できることがわかった。S子自身言葉を覚えようとする意欲があり、何でも人の方を見て模倣するので、繰り返すことによって発語をふやす取り組みをし、効果もかなりあがっていると思われる。(58年度当初は30語程度だったものが、59年11月には150語に増加)。それに伴って変な言葉にこだわって繰り返し言うということが少しずつ少なくなり、覚えている言葉を使ったり、正確ではないがそれらしい言葉を言ったりしながら友達とままごとなどをして仲良く遊ぶ姿も見られだした。授業中挙手して答えるなど、行動も生き生きしてきたといえる。しかし、現在言える言葉は2～3音程度の単語で、それも名詞がほとんどであるので、今後は生活上特によく使われる言葉(ありがとう、ごめんなさい、いただきます、など)の獲得に努めたい。また、引き続き、友達の名前を呼ぶ指導も行なっていきたい。S子は構音障害があり、ウ段やラ行の文字など発達しにくい音がかなりあり、他の人にわかりにくい場合も多いので、今後は養・訓ともタイアップして進めていかなければならないと考える。